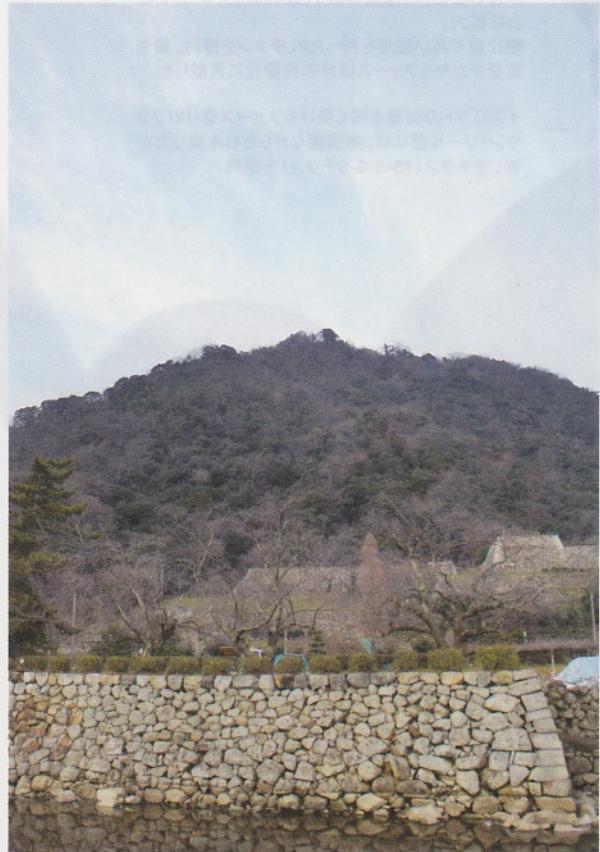


医学博士、東京生まれ。
東京大学医学部附属病院アレルギー・リウマチ内科、
同大学医学部漢方生体防御機能学などに勤務。
主にアレルギー・リウマチの免疫学を研究。
城跡を訪ねることを無上の喜びとし、旅を続いている。

[山野辺の鼓動]
文=関谷剛
text : takashi Sekiya



東 京から飛行機で1時間15分程度。鳥取は東京からは思ひのほか近い場所であり、山海の幸に恵まれた山陰の主要都市です。美しい山・久松山は市街のどこからでもよく見ることができます。標高263メートル。急峻な山の頂に築かれた鳥取城は難攻不落の名城と謳われていました。史書によれば何度も落城したもの、力攻めで落とされたことは一度もなく、すべて正攻法ではない兵糧攻めや謀略によっての落城だったそうです。

鳥取城攻城戦の中でもっとも有名なものは、天正9年（1581年）、豊臣秀吉による「鳥取城の飢え殺し」と呼ばれた有名な兵糧攻めです。この城を武力で制圧するの不可能と判断した秀吉は、得意の兵糧攻めを行うことにしたのです。家臣を商人に扮装させ、あるいは商人自身を丸め込んで、「京が米不足なので高値でも良いから譲ってくれ」などと言つて、城の周囲の米を相場の数倍の値段で貰い集めさせました。それにより城内に備蓄していた貴重な米ま

で売られてしまつたのです。さらに、城下の村を焼き払い、領民を城内に避難させ、食料の減少が早まるようにさせました。そのため狭い城内は戦闘員と非戦闘員の合計およそ4000人がひしめきあい、食料が枯渇していきました。当時の鳥取城主・吉川経家は、この状況を見てあわてて米の調達に着手したのですが時すでに遅く、十分な食料を確保できずに籠城戦に臨むことになつたのです。

秀吉は食料の補給ができないよう城を包囲しました。数ヶ月たつと飢え死にする人も出てきて城内は悲惨な状況になつていきました。経家はこの悲惨な状況に、自決と引き換えに領民の生命を守るという条件で降伏し、一人責任をとつて自害しました。こうして難攻不落といわれた鳥取城は落城しました。

鳥取城を見ると立地の急峻さに驚きます。後方支援も含めた兵站（ロジスティクス）がしつかりしていれば、そこまで悲惨な状況にならなかつたと思うと残念な気がします。兵糧米をお金に換えることは決して悪いことではないのですが、そのタイミングと必要量を

把握できていなかつたということが敗因でしょう。ついつい派手な戦闘に目を奪われがちですが、名将は常に兵站にものす「く気を使つています。常勝軍団といわれたローマ軍には「ローマ軍は兵站で勝つ」という言葉があつたそうです。今明るい鳥取城からは悲惨な籠城戦を想像することは困難ですが、「治に居て乱を忘れず」を今後の教訓に、鳥取城から日本海眺め、兵站（ロジスティクス）について想いを馳せてみるものよいかもしません。



兵糧攻めに苦しんだ鳥取城